

注意点1



理論

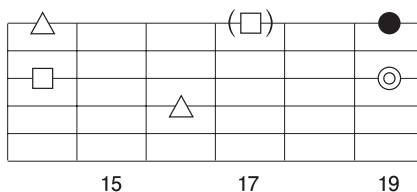
フレー징の幅を広げる
トライアドの転回型

メイン・フレーズ2小節3&4拍目(Dコード)は、**トライアドの発展ポジション【註】**になっているので注意しよう(図1)。通常のトライアド・ポジションでは最低音をルート音にすることが多いが、ここでは最低音が3rd音であるF#音(4弦16フレット)になっているのがポイントだ。また、1弦上ではB音(19フレット)=6th音というテンション音も加えている。このようにトライアドを転回して、さらにテンション音を加えると、メロディ・ラインに変化を付けることができるのだ。また、このポジションは1弦と3弦がともに14フレット&19フレットになるため弾きやすい。このようなトライアドの転回型を活用するとフレー징の幅を広げられるので、ぜひ覚えよう!

図1 トライアドの発展ポジション

◎トニック=D音 △3rd音=F#音 □5th音=A音 ●6th音=B音

・メイン・フレーズ2小節3&4拍目(Dコード)



最低音を3rd音にして、さらに6th音を加えている。

注意点2



右手

変則オルタネイトを導入して
アウトサイド主体でプレイ!

メイン・フレーズ3小節2拍目では、オルタネイトのピッキング順番が不規則になっているので気をつけよう。ここでは、2弦17フレットをダウンで弾いたのち、プリングを挟んで、1弦をアップで弾く(写真①~④)。通常のオルタネイトの順番では、この1弦はダウンになるが、このようにアップで弾くことによって、これ以降の高音弦へのスキッピングがすべてアウトサイドになる。このようなリズムミカルなスキッピング・フレーズは、高音弦への移動はインサイドよりもアウトサイドの方が演奏しやすいので、あえてピッキングの順番をズラした方がよい。オルタネイトの順番はズレるが、16分音符のリズムに乗り遅れないように注意しよう。



3小節2拍目。まずは2弦17fをダウンで弾く。



プリング中に右手を1弦下に移動する。



空振りを入れずに、1弦のピッキング体勢に入って……



15fをアウトサイドのアップで弾こう!

~コラム21~

教官の戯れ言

ポール・ギルバートの符割りキがキツリした超絶プレイは、理数系出身の著者にとって、比較的理解しやすかった。彼が登場するまではコード・トーンを速弾きすると言ったら、スウィープで上昇/下降するのがスタンダードだったので、スキッピングを使ってリズムミカルに演奏する彼のスタイルは斬新だったね。また、彼はタッピングを使ってコード・トーンをメロディ・センスに演奏するなど、メロディ・センスも非常に良いギタリストでもあるのだ。電気ドリル奏法を行なうなど、アイディアマンでもある彼の作品を聴くことで、ギタリストとしての引き出しを増やすことができるだろう。

著者・小林信一、かく語りき
ポール・ギルバート編MR.BIG
『リットル・タイム・ホワイト』

1991年に発表された2ndアルバム。楽器陣による超絶プレイはもちろんのこと、キャッチーなメロディを聴かせる傑作だ。

ポール・ギルバート
『バーニング・オルガン』

ポールが持つポップな音楽性が凝集した5thソロ作。テクニカルなプレイを土台にしながら、実験的な要素も取り入れている。

【トライアドの発展ポジション】 このメイン・フレーズでは、2小節目以外でもテンション音を加えている。例えば1小節目2拍目の1弦14f=F#音は、Gコードの△7th音になるのだ。ほかのテンション音もぜひ調べてほしい。